

## 終南山至相寺

古田紹欽

終南山は南山、中南山、太乙山、周南山、地肺山、楚山、橋山、秦山とも呼ばれ（括地志卷二、大清一統志卷百七十八、長安縣志）西安府城の南五十里、西は郿縣に、東は藍田縣に達する一山脈をなしてゐる。至相寺は至相道場とも稱せられ、この山の幽邃の境に建てられた支那華嚴宗ゆかりの名刹である。

至相寺の創建の年時は明確ではないが、開皇年間の中頃であらうと推定せられる。地論宗南道派に屬する道憑（四八八―五五九）に従つた靈裕（五一八―六〇五）は裕菩薩と崇ばれ、道望一世に高かつたが開皇十一年、隋の文帝の詔によつて京師に入り興禪寺に住した。これより先、靈裕の徒に靜淵（五四四―六一一）があり、同じく宴寢に居し、道を論じ義を説き、終日竟夜、兩情相得て頓に幽深を寫したと云はれ、後、靜淵は迹を終南山に屏ひ、寺を構へ徒を結び、時を分つて業を程したが歸するものが多かつた。偶々、靈裕勅召によつて入朝するに及んで、纔に間隙あれば淵の寺に投じ文帝の信施を以て山路を移し淵の化導を助けた。その寺もと進隘にして川谷に近く、法衆を延くに

遠きがため、その西南の福地を下して淵にすゝめ寺を遷した。これが至相寺である。靈裕はこの福地が法衆の相續して斷ゆることがないのみならず、寺供の虧くることなきことを預見したが、果してその如く、道宜が續高僧傳の靜淵（靜は影に作る）傳を書く頃にも寺門は繁興してゐた。靜淵傳には「自爾迄今五十餘歲、凶年或及而寺供無絶」と見えてゐる。若し靜淵の終南山に一寺を構へた時を以て至相寺の初とするならば開皇十一年直前のことになり、その移建を以て寺の創めとするならば開皇十一年のことであらう。この年、靈裕は詔によつて國統に任ぜられんとしたが表辭して靈泉寺に退いた。靈裕は年三十より著述をはじめ、華嚴、十地、地持、維摩、般若、涅槃、大集、勝鬘、觀經、無量壽、遺教等の諸經の疏、成實、毘曇、智論等の論疏、大乘義章等總じて百餘卷があり、靜淵また耳を歷れば便ち講すと云はれる程の人で、華嚴、地持、涅槃、十地に能く達した。法藏の華嚴經傳記によれば道憑の師たる慧光より道憑―靈裕―靜淵の相承悉くが華嚴經講解に力を盡くした人としてゐる。

靜淵の弟子に智正（五五九―六三九）があり、開皇十年、文帝の召を受け曇遷と共に魏闕に入り勅によつて勝光寺に住し、仁壽元年には左僕射虞慶則が正の高行を欽んで寺額を奏し、仁覺寺を造るに際して迎へられた。時に至相寺に靜淵があつて解行相ひ高く、京城の人々の推仰するを聞いて從ひ、同味期せずして會し、因て同住することこれより數年の長きに亘つた。續高僧傳の智正傳には

「道味江湖不期而會、因留任二十八年、靜恭無事不涉人世、有請便講詳論正理、無請便止安心止觀、世情言晤不附其口、貞梗自課六時無愆」とあり、靜淵に優るとも劣らぬこれまた解行兼ね備つた人であつた。但し同住二十八年は何等かの誤で開皇十年に靜淵、智正が同住したとしても大業七年四月には靜淵は至相寺の本房に卒してゐるから、その間二十二年であらねばならない。智正は靜淵の歿年より二十九年の後、即ち貞觀十三年二月、同じくこの至相寺に寂した。智正の弟子に智現があり、智正の述ぶる所を筆受し、常に紙筆を執つて侍立し累載を経るも初より坐を賜ふことがなかつたと云はれる、或時、足疼み、心悶えて覺えず倒仆したが、智正は釋迦菩薩の足翹ぐるごと七日にして尙傳揚のあつた故事をあげ、纔に立つて顛倒するは心輕きの致す所であると呵責してゐる。洵に法のために弟子を訓育すること嚴格であつた。道宣は智現傳(智正傳附傳)のうちに「其翹仰之極、復何得而加焉」と讚歎してゐる。智正は屢々華嚴、楞伽、勝鬘、唯識、攝論を講じ、華嚴疏十卷、並に楞伽等の餘の抄記を製した。就中、華嚴經に達してゐたと思はれる。年少にして曇遷に従つた靈辨(五八六—六六三)は十八にして唯識、起信等の論、勝鬘、維摩等の經を講じ、後、仁王經、十地、地持、攝大乘等の論も講じたが一乘の妙旨は華嚴經に越ゆるなきを知つて、經論の敷揚を廢して智正のもとに茲典を研めた。靈辨には華嚴經の疏十二卷、鈔十卷、章三卷があり、竝に世に行はれたと云ひ、この經を講ずること四十八遍、京城及諸州僧尼の歸戒を受くるもの一千餘

人に及んだ。又、樊玄智（一六八二）なるもの十六にして華嚴宗初祖杜順に投じて諸勝行を習ひ、華嚴經を讀誦してこの經によつて普賢行を修し、ついで智正（華嚴經傳記卷四整に作るも知正の誤なるべし）に服膺してこの經を溫習した。二十餘載の間、晝は華嚴經を誦し、夜は禪觀を修したと傳へられる。華嚴宗第二祖智儼（六〇二—六六八）また年十二にしてこの神僧杜順に就き、杜順の上足達法師に訓誨を受け、十四歳曇遷の弟子たる法常に攝論を聽き、辨法師、琳法師にも従つて後に智正の下にこの經を聽いた。その著す所の經疏たる搜玄記は實に二十七歳のときに書かれたものである。他に華嚴孔目章、華嚴五十要問答等から金剛經疏、攝論疏等凡そ二十餘部の著がある。

此處に問題となるのは華嚴宗に於ける智正の地位である。華嚴宗の傳統としては杜順—智儼—法藏の相承説を立てるのであるが華嚴教學の學統としては如上に於てこれを見た如く慧光—道憑—靈裕—靜淵—智正—智儼—法藏と繼承されたものである。傳統説の初祖とする杜順（五五七—六四〇）の傳が法藏の華嚴經傳記にすら別傳がなく、續高僧傳には別傳があつても華嚴經に關することは述べられてをらず、弟子に智儼があつたと云ひながら其處には華嚴の相承は云はれないのであつて、若し相承説を立てるならば、智正を初祖とすることが極めて至當のやうに考へられる。嘗つて境野博士はこの理由を以て智正初祖説を唱へ、更に智正の弟子智現を智儼と同一人視された。（支那佛敎史の研究、華嚴宗成立の史實）一體、杜順—智儼—法藏の傳統説は何時頃から唱えられるに至つたであら

うか、續高僧傳が道宣によつて書かれた頃にも、或は法藏(六四三—七一二)の在世中にも云はれなかつたのではなからうか。華嚴宗の第五祖と云はれる宗密(七八〇—八四一)の注華嚴法界觀門に、

「京終南山釋杜順集、姓杜名法順、唐初時行化、神異極多、傳中有證、驗知是文殊菩薩現身也、是華嚴新舊二疎初之祖師、儼尊者爲二祖、康藏國師爲三祖云々」

とある三祖説が恐らくこの傳統の最初のものゝやうに思はれる。宋高僧傳の法藏傳に「…華嚴一宗付授澄觀、推藏爲第三祖也」とあるのは宗密のこの説によつたものに相違ない。

境野博士の智正初祖説に對して常盤博士は杜順初祖の傳統説を擁護して論駁せられた。(支那佛教の研究、支那華嚴宗傳燈論)華嚴五祖説は勿論であるが斯様に見れば三祖説の成立も遅いのであるから兩博士による兩説共に一應の理があらう。

然し兩説が何れにしても杜順、智正、或は智儼、智現が略時代を同じくして終南山に據り、華嚴經の讀誦講説に當り、又この經によつて普賢行を修した人々であつた。憶うに至相寺が最も隆盛であつたのは此等の俊英を擁した七世紀の頃であつたであらう。永徽六年五月、至相寺に終つた弘智は嘗つては道士であつたが佛門に歸し、幽栖を樂んでこの寺に住み、華嚴攝論等を講じてゐたことも知られる。

總章元年十月、智儼は六十九歳にして歿した。智儼は至相寺の寺號よりして至相尊者、或は至相

大師と呼ばれ、至相寺と華嚴宗との關係密接なものがあつたが、師の歿後次第にこの寺は衰微した。法藏も第四祖の澄觀も宗密もこの至相寺には住しなかつた。澄觀、宗密は同じ終南山にあつても草堂寺に住した。武徳九年十二月に歿した終南山玉泉寺の住僧靜藏の弟子に道刪なるものがあり、師の歿後年時は詳でないが至相寺に住して世に名があつたと云ひ、智儼の歿後凡そ四十年を経た神龍から景龍年間に、于闐の質子であつた智嚴が所居の宅を捨て、寺となし奉恩寺を創めて住し、後に至相寺上座となつたと云ふ。智嚴の至相寺住が恐らく僧傳のうちに顯れた最後の記録であらう。然して道刪、智嚴共に華嚴經を敷揚したとは見えす、最早此頃には開創以來の華嚴の道場ではなかつた。智儼も晩年は雲華寺に住したものの如く、法藏が従つたのはこの寺に於てあつたし、總章元年に寂したのは清淨寺であつた。

次に至相寺に直接の關係はないが、寺域が幽靜の所であつたことから多くの祖師達がこの近くに葬られ、その塔がたてられた。續高僧傳に散見してゐるものを拾つても次のやうな人達がある。

周の武帝から欽承せられ周國の三藏とせられた曇崇は開皇十一年隋の文帝からも勅召を受けて興善寺に任し、帝自ら師兒と稱し、獻作后また師女と稱して禮接を厚くし、皁白の弟子五千餘人にも及んだといふ。開皇十四年、八十歳を以て寂したが骸を至相寺の右に送り、白塔を建てた。又、延興寺通幽なるもの、大業元年正月に卒したが弟子を誡むるに殘身を諸の禽獸に施し、餘殃を滅せん

ことを遺言し、その志によつて至相寺の前峯に林葬し、同年十一月華嚴を本宗とせる慧因も歿して、これまた遺言によつて前峯の林麓に屍を陳した。ついで同五年十一月には普安が靜法禪院に終つて、至相寺の側に遺骸をおさめて塔を起した。普安は法藏の華嚴經傳記卷四にもその傳が存する通り、常に華嚴の讀誦を業とし、華嚴力を得てゐた人である。唐の高祖の武徳六年五月に到つては三論宗の吉藏が歿したが華嚴にも達し、同じく華嚴經傳卷四にその名が見られる。骸を至相寺に送つたが時炎熱に屬しながらも繩床に坐して屍臭を催さず、加跌を散じなかつたといふ。此年また道契に従つた道宗は成實の學者であつたが勝光寺に永世し、至相寺の南巖に收葬した。

また唐代の十大徳の一人である慧因は寶瓊に成實を聽き、智辨に三論を稟け、慧曉、智瓊に調心觀法を授けられ、仁壽三年文帝が禪定寺を創むるや招かれて知事上座となつて禪學を訓肅した。(拙稿、禪定寺の變遷と其住僧、支那佛敎教學三卷二號)貞觀元年二月、この禪定寺即ち後の大莊嚴寺に八十九歳を以て入定正坐して寂し、至相寺に遷坐して葬つた。

以上の如く見て注意すべきことは貞觀以後、私の目を通した限りに於ては續高僧傳に至相寺に葬り又は塔を礎いたといふ記録のないことである。先に神龍、景龍の頃に住した智嚴を以て至相寺の名の見ゆる最終の記録であるといつたが、貞觀直後の頃から次第に荒廢して行つたものではあるまいか。遙に下つて大曆年中になつて三階の信義を唱へた信行(五四〇—五九四)の塔院として百塔寺が建てられたがこれは至相寺の故地であつたが如くである。(十七・七・廿二)